

小川環樹著

〔東洋學叢書〕

中國語學研究

刊行
創
文
社

小川 環樹（おがわ・たまき）

明治43年京都府に生まれる 昭和7年京都大學文學部卒業、東北大學教授、京都大學教授をへて現在京都大學名誉教授。

〔著書〕『唐詩概説』『中國小説史の研究』『風と雲』

〔中國語學研究〕

昭和五二年三月三〇日 第一刷發行
昭和五九年二月二〇日 第二刷發行

定價七八〇〇圓

著 者 小 川 環 樹

發行者 久保井理津男

東京都千代田區一番町一七—三

印刷者 中 内 康 兒

東京都文京區關口一—二四—八

發行所

東京都千代田區
一番町一七番地

株式會社 創 文 社

〒102 電話東京二六三—七二〇（代表）
振替東京二—九二四七二

目次

第一部 音韻史考説

- 一 詩經異文の音韻的特質……………五
- 二 形聲字音の特質——カールグレン氏の學說を中心にして……………三
- 三 反切の起原と四聲および五音……………四
- 四 你と爾および日母の成立……………七
- 五 等韻圖と韻海鏡源——唐代音韻史の一側面……………六
- 六 「南朝四百八十寺」の讀み方——音韻同化の一例……………七
- 七 唐詩の押韻——韻書の拘束力……………八
- 八 蘇東坡古詩用韻考……………二六
- 九 書史會要に見える「いろは」の漢字對音について……………二五

第二部 語形と語義の變化

- 十 代名詞俗們的沿革……………一五

十一 多少と早晚……………二五

十二 風流の語義の變化……………三〇

第三部 文字學と字書の研究

十三 中國文字の構造法……………三七

十四 千字文について……………三八

十五 宋・遼・金時代の字書……………三九

十六 山梨稻川の説文學の著述——天理圖書館所藏の稿本について……………四〇

第四部 紹介と批評

十七 李方桂氏「中國における諸民族の言語と方言」……………四二

十八 董同龢氏「中國における言語調査」……………四六

十九 趙蔭棠氏の『中原音韻研究』を讀みて……………四七

二十 ポール・セリュイス氏「楊雄の『別國方言』にみえる漢代諸方言の研究」を評す……………五〇

あとがき……………五三

掲載誌一覽……………五〇

索引（文獻・著者名・事項）……………一三

CONTENTS

Part One: Studies in Historical Phonology

1. Phonological Characteristics of Textual Variants in the *Shih-ching* 詩經.....5
2. Characteristics of Phonetic Compounds 形聲字32
3. The Origin of *Fan-ch'ieh* 反切 Spelling and Four Tones 四聲 and Five Sounds 五音.....48
4. A Study of the Differentiation of the Pronouns *ni* 你 and *erh* 爾 in Ancient Chinese and their Sound Changes.....57
5. On the Date of Rhyme-tables 等韻圖 with Special Reference to *Yün-hai ching-yüan* 韻海鏡源 ——On the Phonology of the T'ang Dynasty66
6. The Pronunciation of the Line "*Nan-ch'ao ssu-pai-pa-shih ssu*" 南朝四百八十寺——An Example of Regressive Assimilation.....77
7. Rhymes of T'ang Poetry——Restricting Influence of Rhyme Books87
8. Special Features in the Rhymes of Su Tung-p'o's 蘇東坡 Old Style Poems.....116
9. On the Transcription in Chinese Characters of the Japanese Syllabary in the *Shu-shih hui-yao* 書史會要152

Part Two: Morphological and Semantic Changes

10. Evolution of the Pronoun *Tsan-mên* 偕們165
11. Semantic Changes of the Words *To-shao* 多少 and *Tsao-wan* 早晚185
12. Semantic Changes of the Word *Fêng-liu* 風流.....200

Part Three: Studies in the Chinese Writing System and Dictionaries

13. Evolution of Chinese Characters217
14. On the *Ch'ien-tzu-wên* 千字文 or 'Thousand Character Text'..... 226
15. Special Characteristics of Dictionaries of the Sung 宋, Liao 遼 and Chin 金 Periods242

16. Yamanashi Tōsen's 山梨稻川 *Studies on the Shuo-wên chieh-tzu*
說文解字254

Part Four: Translations and Reviews

17. 'Languages and Dialects of China', by Li Fang Kuei 李方桂
..... 275
18. 'Linguistic Surveys of the Institute of History and Philology',
by Tung T'ung-ho 董同龢296
19. Review of Chao Yin-t'ang's 趙蔭棠 *Chung-yüan yin-yün yen-chiu*
中原音韻研究325
20. Review of Paul L-M. Serruis's *The Chinese Dialects of Han*
Time According to Fang Yen 方言339

Afterword.....353

A List of the Dates of Articles Published in Periodicals
and Books360

Index1~13

中國語學研究

第一部 音韻史考說

一 詩經異文の音韻的特質

古典の本文の校訂は種々の立場からなされうるのであろう。校訂が本文の正しい解釋に對して必要であることは言うまでもないが、古典の本文の相違（異文）は、その書物を言語史的に研究しようとするとき、一層重要である。私に取り上げるのは「詩經」であるが、詩經を言語史の研究對象とするならば、第一に問題となるのは、この書物の編纂の時期であり、第二にはその傳承の經過である。この二つをどのように把握するかに従つて詩經の言語史の資料としての價值、言いかえれば、詩經の言語の位置づけは、大いに異なったものとなる。そしてこれらの問題の處理にあたつて詩經の異文は一つの手がかりを提供するであらう。なぜなら、文字の相違が音の相違でもあるならば、その相違が如何にして發生したかをつきとめることは、少なくとも詩經の傳承徑路に對し、幾分とも新しい光を投ずるにちがいないからである。

周知のごとく今日我々が讀む詩經の本文は正確に言えば「毛詩」であつて、漢代の一つの學派の傳承したものである。毛は古文家に屬するが、これに對立する今文家には齊・魯・韓の三つの學派があつた。合せて三家詩とよばれる。三派はそれぞれ個々の詩篇および章句・字義の解釋を異にしたのみならず、その持ち傳えた本文にも

相違があった。三家詩は早く亡び、唐代以後は毛詩のみが行なわれたから、三家の解釋その他の異説は、今は斷片的に諸書に散見するのみである。これら遺説・異文の收集のしごととは南宋の王應麟（一二三二—一二九六）が着手して以來、多くの學者がこれにたずさわった。清朝の陳喬樞（一八〇九—一八六九）は利用しうる限りの資料から最大數を集めて、このしごとを殆んど極限にまで進めた人であった。王先謙（一八四二—一九一七）の『詩三家義集疏』二八卷（乙卯一九一五盧受堂刊本）は主として陳氏の成果を整理して讀み易い形にしたものであった。

王應麟以後の學者の業績は異常な努力の結果であるにも拘わらず、收集された資料の大部分は second hand のものであり、資料の取り扱い方にもいくらかの疑問がある。字句の解釋すなわち遺説はしばらくおき、異文だけについて言えば、最も信頼できるのは隋の陸德明の「經典釋文」にしろされたものであるが、それより一層確實なのは、熹平石經の本文である。これは後漢の熹平四年（前一七五）洛陽に立てられた石碑であつて七經（易・書・詩・儀禮・春秋・公羊傳・論語）の本文を刻し、校記を附する。すべて今文家の傳承したものである。詩經の場合、刻されたのは魯詩の全文であつたが、他の二學派、齊詩と韓詩の異文を校記に收めていた。この石碑（以下に石經とよぶ）は唐以前に破壊されたが、その破片の殘存したものは宋代の學者も利用し、洪适（一一一七—一八四）の「隸釋」卷一四にはその一部分を載せる。けれども魯詩について言えば、ただ一個の殘石を收めただけであつた。ところが、今世紀に入つて、石經の破片が新たに洛陽の遺跡から續々發見されるに及び、その研究の局面は一變した。出土したのは小さな破片が多いけれども、刻された文が現在の經書のどの部分にあたるかが確認される場合には、これによつて後漢末すなわち約千八百年前の經學者がよりどころとした本文の原形がそのまま見られるのであつて、正に一大發見と稱することができる。

この石經の破片（以下殘石とよぶ）がもたらした新しい事實はすこぶる多い。詩經だけに限つても、魯詩の篇の

順序が今の毛詩とは異なる處があること（小雅・大雅にいちじるしい）、篇次は同じくても各篇の分章がちがったり、又章の順序が入れかわつていたりすることなどが明らかになった。それらは概ね南宋以後の學者が知るを得なかつた事である。我々は今日通行する毛詩（以下には今本毛詩とよぶ）の定着以前の詩經のテキストについての知見を更新するに至つたと言つてもよいであらう。

私ははじめに一言したような問題を意識しつつ、熹平石經殘石の魯詩の部分（以下、石經魯詩とよぶ）をしらべてみた。そして二三の注目すべき事實を見出した。それに對する私の解釋を述べ、ならびにそれに關連して詩經の言語の傳承につき、私が今いだいてゐる考えをも併せ述べる。經學あるいは古代語學に造詣のふかい方々が教示をおしまれざらんことを切望する。

ここで私の使用した資料につき一言しておく。その一は羅振玉氏の『漢熹平石經殘字集錄』三冊（庚午すなわち一九三〇年石印本）、その二は馬衡氏の『漢石經集存』二冊（北京・科學出版社の一九五七年刊本）。前者はその前年（一九二九）に羅氏が拓本を得るにしたがつて陸續刊行した四編四冊をさらに整理重編したもので、羅氏の序によると、魯詩の本文の破片およそ一二一石、これを綴合して八〇石とし、字數はすべて一一四〇字あり、校記の破片は二六石、これを合わして二一石とし、字數一五九字あると言う。後者馬衡氏の「集存」は、魯詩だけでも羅氏よりは多く、校記をふくめて二〇二石であり、その内本文は一三六石ある（ただしこれは破片の接續できるものを綴合した後の數）。又一九四石から二〇二石までの九石は二字あるいは一字の破片で、どの篇の字か不明なものがある。なお馬氏の第三七石は前述の洪适の「隸釋」卷十四に載せてあるのを轉載したもので一三行一七三字あるが、その原石はもとより原拓本も今は見ることができない。これを除けば新出土の魯詩本文の殘石は一三五石となるが、その内、一石で最大數の字を含むのは馬氏第九石の一一行で、殘缺して讀めない字を除くと、一五一

字(章名を指示する其一二などの字も数えない)があるが、實は一四個の破片を綴り合わせた結果である。一三五石の字數を合計すると一四四〇字ほどで「隸釋」からの轉載一七三字を加えても一六〇〇字餘である。詩經全體で約三萬字以上であるから、この殘字は全體の十五分の一に足りない。

二

以上に述べたとき「石經魯詩」と「今本毛詩」との文字のちがい(以下これを「魯詩異文」または單に「異文」とよぶことにしよう)が、詩經の音韻を考えるにあたつて、いかなる價值を有するかを論じよう。いうまでもなく異文は、まず字形の相違として現われる。そして字形の相違はその文字が表わす單語の發音の異同から進んで、その單語の有する意義の相違にも及ぶものである。だから、異文から字義の相違が明らかになるならば、その文字を含む一句の意義に影響をおよぼし、さらには一篇の意義にまで及ぶかも知れない。しかし私が以下に取り扱おうとするのは、發音のちがい、すなわち音韻上の問題に限る。

字形と字音(實は文字の代表する單語の發音であるが、簡便のため以下すべて字音すなわち文字の reading として記述する)の關係は、やはり單純ではない。(a)字形が異なつても字音は異ならない場合がある。その二つの字が實は同一の單語を代表すると認めうるならば、その一方は假借字(或いは通用字)であつて、他方が本字(すなわちその單語に對する專用字)であることが多い。もちろん、同音であつても同義だとは限らない。けれども、そのこまかいせんさくは、ここでは行なわない。(b)字形が異なり、字音も異なるもの。これは原則として異なる單語を代表するはずである。(c)、(d)兩者の中間に位するものがある。すなわち字形に共通點があつて、その共通點は字音の

類似を示すと考えられる場合である。そこで類似 (similarity) と私がよぶものと、完全な音の同一 (identity) と私がよぶものとは區別する必要がある。

かくて字形と字音との關係は (a) 同音異形 (b) 異音異形 (c) 類似音異形の三つに分かれる。同音とは何か。一般に漢字は一字が一音節 (syllable) を代表する。音節の要素は三つある。聲母 (initial) 韻母 (final) 聲調 (tone) がこれである。このうち聲調はいわゆる四聲のことであるが、古代語の聲調については今日まだ十分あきらかになつたとは言えないから、詩經の言語においても確實につきとめることは困難である。實は我々は詩經時代の言語を、特にその音を、直接に知る方法はない。それは聲調だけでない。詩經時代の言語音を上古音とよぶならば、漢字の上古音の音價 (すなわち音の體系内において占める位置) は、清朝の古音學者以來、最近のカールグレン (Karlgren) 氏に至るまで、これまでの學者が爲して來たごとく、後六世紀の言語 (「切韻」によつて代表される) の發音を基礎として定める外はない。⁽⁵⁾ 故に我々は、他に證據がない限り、中古において同音である字は、すべて上古においても同音であつたとの假定の上に立つ外はない。言いかえれば、中古において、さきに述べた聲母・韻母・聲調の三要素を等しくする字の音は上古においてもこの三要素を等しくしたと假定するのである。

魯詩異文の中から字は異なつても完全な同音 (identical) の例を一二あげよう。馬五三 (これは前掲の馬衡氏遺著『漢石經集存』の第五十三石をさす。以下これにならう) (この石は羅氏の『集錄』には未收) は次のような斷片である (アラビア數字はこの斷片における行を示す)。

- 1 鬱及莫七 (六月食) 鬱及莫、七 (月亨葵菽)、
- 2 上入執宮公 上入執宮功、(晝爾于茅)
- 3 疆其八七月八章 (萬壽無疆) 疆七月八章 (章十一句)

4 其八予羽蕉蕉予尾

予羽譙譙、予尾（脩脩）、

5 蠋烝在桑野敦

（蝟蝟者）蠋、烝在桑野、敦（彼獨宿）、

6 零雨

（我來自東）、零雨（其濛）、

この石は今本毛詩では豳風七月の篇から、その次の鴝鵒および東山の三篇にまたがる断片である。下方に掲げたのは今本毛詩の對應する部分の抜き書きであつて、石に缺けている部分は括弧を附した。石の第二行は七月篇の第七章にあたるが、最後の字「公」を今本毛詩では「功」に作る。公と功とは字義は異なるが、中古音は全く同じで、ともに古紅切、平聲一東の韻に屬する（以下反切および韻の名は「廣韻」による）。カールグレン氏の *Grammaire Serica Recensa* (Stockholm, 1967) では 1172d 功 *kung/kung/kung, 1173a 公 *kung/kung/kung とある（以下 GS と略稱する。* を附したのは K 氏が再構成した上古音、／／の間にあるのは中古音、最後の／以後のは現代音である。以下には概ね上古音と中古音のみを示し、最後の現代音は省略する）。毛詩の功を魯詩（？）が公に作る例はもう一つ周頌・武の校記にもある（馬一四八）。

また馬四五の断片では

1 悠

2 車隣

の三字が讀めるが、これは秦風の渭陽篇の第二章「悠悠我思」の句の一字と秦風十篇の終りに記された題すなわち秦車隣十篇……の一行の中の二字だと推定される。今本毛詩では各風の終りには秦風十篇二十七章一八一句と、いうように章句の數のみを記するが、各國風の初に秦車鄰故訓傳第十一のように記する。石經魯詩は各國風の首篇の名を終りにもう一度くりかえすのである。そして毛詩の車鄰を魯詩では車隣に作ったことが分かる。この隣